

文献案内

坂本亮太「至一人考―南北朝期における臨済宗法灯派禅僧の側面―」
 (『和歌山県立博物館研究紀要』二八、和歌山県立博物館、二〇二三年三月)

事蹟に謎も多い和歌山県ゆかりの鎌倉末期～南北朝期の一禅律僧について、多様な素材を広く検討し、その実像を浮かび上がらせる論文である。

まず、興国寺を開いた無本覚心の伝記『紀州由良鷲峰開山宝灯円明国師之縁起』における、至一の事蹟を確認する。永仁五年(一二九七)覚心九十一歳の時、粉河寺大門供養の導師に招かれ、布施を断り稚児を所望し、出家させて覚一(のち至一)と名付けた。至一は粉河寺に禅院の誓度院を建て、覚心を一世、自らを二世とした。粉河寺の中興に力を尽くし、鞭で石を動かす奇瑞を現わした。鎌倉に下向して弁財天法を修し、粉河寺本堂の火災を察して童子を飛ばして鎮火した。元弘元年(一一三三)覚心三十三回忌には、鎌倉に千光院を建立して大法会を催した。すでに伝説化しているが、生まれ故郷とされる紀の川市西川原の釋尊寺には至一を描いた「勝因溪雲和尚寿像」が伝わり、亡くなる二年前の応安元年(一一三八)中巖円月の賛があり、一部字句が対応する。その故郷には伝承・ゆかりの品とされるものがあり、供養塔から十五世紀末～十六世紀頃に至一を顕彰する動きがあったと推測する。

ついで誓度院の勧進活動について、先行研究もある古文書を再読する。誓度院は至一以前より存在し、至一は延慶三年(一一三〇)に勧進僧として現れ、朝廷・武家との関わりを持った。また粉河寺領に弁財天社が多く残り、荘域の根本文書への加筆とも絡め、至一の得意とした修法との関わりを推測する。さらに観応元年(一一五〇)に仁和寺にあったことと『太平記』に描かれた外法の使い手としての姿との整合性を確認し、東国における活動拠点として鎌倉亀ヶ谷の勝因寺と鶴岡八幡宮近くの新宮とを指摘して、『頼印大僧正行状絵詞』にみえる後鳥羽院の靈託者と歌論書『井蛙抄』の水無瀬御影堂長老としての姿を照合させる。最後には葛城修験の和泉国犬鳴山七宝瀧寺の縁起にも触れて法灯派の南朝・北朝二方の依頼を受けた姿を示す。

史料細部の解釈や事実性を認める範囲などに検討の余地はあるものの、断片的で史実の抽出が難しい各種の史料と向き合いながら、地域の歴史を掘り起こす作業がなされている。

(藤原重雄)

白川宗源「中世の高安寺について」(『新府中市史研究 武蔵府中を考える』三、府中市史編集委員会、二〇二二年二月)

東京都府中市に所在する禅宗寺院・龍門山高安寺について、『新府中市史』中世資料編の編纂成果を踏まえた二点の史料の再検討を中心に、曹洞宗寺院として戦国期に再興される以前の、鎌倉末期から室町期にかけての状況を明らかにする論文である。

検討する史料の一点目は、『無準師範頂相』(円覚寺所蔵)である。この頂相に付された東陵永興による画賛は、延文四年(一一五九)ごろに高安寺住持の少室慶芳の求めによって記されたものである。賛文では無準師範から無学祖元、高峰顕目を経て少室慶芳に至る臨済宗仏光派の法脈を踏まえた記述になっている一方で、少室の直接の師僧である空室妙空への言及がないこと、少室への呼称がすでに「長老」となっていることから、この頂相が空室から少室への「嗣法の証」としてではなく、遠祖無準師範への「敬慕の対象」として制作されたものと位置づけ、高安寺と仏光派との関係を指摘する。

二点目の史料として、足利尊氏の宿願により文和五年(一一五六)に開版された『智感版大般若経』巻二の出資結縁者に「住高安比丘慶芳」が見え、また『普濟寺版五部大蔵経』にも高安寺僧の名が見えることに注目し、これらの出版事業が円覚寺正統院に拠った仏光派を中心に行われたことから、高安寺と円覚寺、そして鎌倉府・鎌倉公方との関係が深いことを指摘する。なお、常陸来迎院所蔵『大般若経』写本、日光山輪王寺所蔵『大般若経』写本にも高安寺僧が見え、これらの書写は天台談義所のネットワークを介して行われていることから、武蔵定光寺談義所との関わりも推定する。

禅僧による画賛を史料として読み解く手法はつとに注目され、着実にその成果が積み重ねられているが、本論文は単に賛文を読むだけでなく、賛文の記述を禅宗の門派の論理から分析した上で、典籍の刊記や奥書とも照合して寺院間の関係を明らかにしようとしたものであり、地域史・寺院史への活用について新たな可能性を示したものといえよう。

(川本慎自)

文献案内

林温「仁和寺観音堂壁画―近世初期仏教空間の構想―」（『芸術学』二四、三田芸術学会、二〇二三年三月）

仁和寺の観音堂は寛永・正保年間に幕府の支援により再興された堂舎の一つである。一連の再興事業に尽力した学僧の一言坊顕證の構想のもと、絵仏師木村徳應が内部の壁画制作を担当した。本論文はこの壁画を詳細に分析したものである。また、着工以前の計画案『畫像并綵色目錄』と、その後の二点の顕證のメモにより、当初の構想とその変遷も明らかにされている。

著者の考察によると、観音堂の壁画は密教寺院の仏堂にしては特異な点が多い。例えば、須弥壇後壁画の白衣観音像は禅宗寺院に相応しいもので、徳應が東福寺の明兆筆とされる作品を受容し作成した可能性を指摘する。柱絵・後壁裏面・側壁画においても持物の改変、密教風ではない像、六臂の帝釈天のような類例のない像が存在する。

須弥壇後壁画の四天王については、緑色身像は左手を右手として誤って描いており、また四方への配位が一致しない。絵仏師にしては初歩的な誤りで、顕證も見落としたのは不審であるという。このほかにも制作に携わった絵師の技量を疑わせるような事例が指摘されている。

ただし、著者の「仁和寺五重塔内莊嚴と顕證」（『MUSEUM』六八四、二〇二〇年）での検討によると、五重塔では顕證は密教事相学者的な姿勢で忠実な伝統図像を描かせているという。必ずしも本来の伝統的な図像が閑却され、仏堂の莊嚴画の質が低下したとはいえないように、絵師の判断のもとに新しく自由な図像表現が取り入れられたとも評価できる。徳應は仙台伊達家・熊本細川家などの大名家や、黄檗宗に関する仏画・肖像画等も手掛け、個性的な作品を残す、近世前期の興味深い絵仏師の一人である。その事績のなかでも重要な仁和寺の作品群に関する貴重な成果である。

また、近世前期の仁和寺再興については、絵画のみならず多様な作品が残され、文献史料にも恵まれる。これまでの蓄積の上に、各分野の研究がより充実することで、背後にある学問や思想、さらには国家における仏教の位置づけにも迫りうるように思われ、今後の進展が楽しみである。（林 晃弘）

安里進・外間政明編著『古地図で楽しむ首里・那覇』（風媒社、二〇二三年三月）

「古地図で楽しむ」と銘打った一般向けシリーズのうちの一冊であるが、専門的な内容が多く含まれる。琉球という地域の特異性もあって、実際には「古地図」に加えて、紙面の多くを屏風絵や絵図などの近世の絵画史料の分析にあてられている。首里・那覇関連の絵画史料についての研究書といえば、先ごろ刊行された『琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究』（思文閣出版、二〇一九年）があるが、こちらが大型・高額であるのに対して、本書は手軽に入手・利用できる点があるがたい。

パート1「都市化と古地図・絵図」が総論としての役割を果たしており、安里進・平川信幸の論考が、時代ごとの作品群の性格と、制作者の視角、景観年代特定のポイントなどを明らかにしている。パート2以下は、各論というべき内容で、まずパート2「首里と那覇」で都市景観について、崎原恭子・外間政明が分析を加える。パート3「都市生活を支えた生産と流通」では、都市・港湾の機能と産業活動に関する、伊集守道・喜納大作・麻生伸一の論考を収める。パート4「都市のライフスタイル」では、篠原あかね・伊禮拓郎・梅崎晴光が都市住人の風俗・文化を扱っている。

カラー写真を豊富に掲載して、読みやすさを追求したと思われる本書は、どちらかというと、史料全体の構成よりは描きこまれた細部のトピックにスポットを当てた内容となっている。楽しく読みながらも、今後のさまざまな研究テーマの手がかりを得ることができそうな一冊である。

注意を要するのが、本書では「古地図・絵図の画像には、画像編集ソフトで退色復元処理を施し」という点である。「当初の色に近い画像がわかりやすく楽しめると考えたから」というが、復元の根拠が確かなものであるのか、若干の不安を覚える。ちなみに、カバー図版の「琉球貿易図屏風」（滋賀大学経済学部附属史料館蔵）の海の色が、現状ではやや緑色を帯びているのに対して、かなり鮮やかな青色になっているのには驚かされた。

（高橋慎一朗）